

青少年育成センターだより

第44号 平成30年6月



一昨年、8月から発行しているこの「青少年育成センターだより」も大分、周知されるようになってきました。いろいろなところで「読んでいるよ」「楽しみにしています」という声を聞き、大変うれしく思います。このセンターだよりは、第1号から防府市のホームページに掲載しています。また、各公民館や文化福祉会館の入り口にも設置しています。どうぞ、これまでのものも読んでみてください。

勉強をなさい！！

「いつまで、遊んでいるの。早く勉強をなさい」「今日は、もう勉強をすましたの」と子どもに声をかけているお母さん。「分かっている。今からしようと思っていたのに」と返事をしている子ども。そのような光景がみられる家庭は多いのではないのでしょうか。親として、このような声掛けをするのは、子どもに対する願いや思いが大きいからなのでしょう。子どものことが気にならないという親はいません。しかし、子どもにとって、このような「勉強をなさい」という言葉はどのように聞こえているのでしょうか。きっと気持ちよくないでしょうね。みなさんの子ども時代、親からこのような声掛けをされたとき、うれしいという思いをもたれなかったのではないのでしょうか。

ここで、平成26年に青色LEDの開発に対する功績でノーベル物理学賞を受賞された赤崎勇先生の話を紹介しましょう。

「育った家庭はといいますと、両親とも放任主義で、人様に迷惑をかけない限り、自分のやりたいことをやりなさいという方針でした。勉強をしろとはひと言も言われませんでしたから、日が暮れるまで磯海岸で貝殻や小石を拾って遊んだり、城山で虫取りに夢中になったりしていましたね。確か小学校3年生の頃でしたが、ある日家に帰りましたら机の上に綺麗な模様の小箱が置かれていました。父親に聞くと鉱物標本だと。中には色や形の違う様々な鉱物が入っていて、子ども心にとても興味をそそられました。毎日、どんなに遊び疲れて帰ってきても、必ず標本を眺めていたことをよく覚えているのですが、これは私の科学者としての原点だと思います。・・・桜島がある錦江湾には軽石がたくさん浮いておりましてね。軽石は水に洗われて丸くなるんです。私はなぜかそのザラザラした表面に興味がありましたが、後に半導体の研究をする時に、ゲルマニウム結晶の表面の模様を毎日毎日飽きもせず顕微鏡で眺めていられたのは、子どもの頃の体験があったからでしょうね。」

いかがでしょうか。「赤崎先生はもともと素晴らしい力を持っておられたので『勉強をなさい』と言う必要はなかったのだ」と思われる方も多いでしょう。ノーベル賞を受賞されるほどの方ですから、十分な才能を持っておられたことなのでしょう。しかし、それ以上に子どものことをよく知っていた両親の存在が大きかったのではないのでしょうか。赤崎先生のお父さんが鉱物標本を与えられたのも、子どもの趣向についてよく知っておられたからなのです。

人は指示のような外からの働きでは、本物の動機にはなりません。行動の動機は、内なるものでなくては長続きしません。「自分はこんなことをやってみたい」というようなものです。その内なる動機に火をつけることが親の大切な役目になるのではないのでしょうか。この内なる動機は勉強だけでなく、スポーツにしても、また他の何かに取り組むときに大切なものになるのです。

子どもの心に点火をするのはお父さん、お母さん、あなたですよ。

問合せ先：防府市教育委員会生涯学習課 青少年育成センター（23-3013）